

# 積極的に表現する授業づくり

## － 音楽の授業を通して －

学習開発コース (10220915) 三 澤 和 沙

音楽科の授業における「表現」に着目し、自分の内にある思いを、人の目を気にせず、より楽しく存分に表現できるようにするための教師の手立てを研究する。文献研究と授業実践から、音楽科では①「表現」と「鑑賞」が常に一体化していること、②他者とのかわり合いにより、よい人間関係を構築すること、③基礎・基本の定着、④表現の楽しさを知るための心と身体を開放させる活動の4点が大切であることが明らかになった。

[キーワード] 小学校音楽, 「表現」と「鑑賞」, かかわり合い, 基礎・基本, 心と身体の開放

### 1 問題の所在と方法

#### (1) 問題の所在

青年海外協力隊として赴任した途上国パラグアイでの音楽教育活動を通して、改めて日本の教育に対する緻密な計画性と、ものの豊かさを知ることができた。同時に、日本の音楽教育との相違点を感じた。それは、授業の場においてより楽しみたいとするパラグアイの児童と、楽しむよりも上手になることを優先する日本の児童との学習姿勢の違いである。国民性の違いと言ってしまえばそれまでだが、授業で音楽を存分に楽しみ、かつ表現した満足感や達成感を味わいつつも、そこに豊かな学びのある授業を目指したい。

そこで着目したいのは、音楽科の授業における児童の“表現”に対する姿勢である。日本の子どもたちの姿勢は、年齢を重ねるごとに消極的になる傾向があるように見える。中学校で音楽科講師を務めていた際も、存分に表現しきれていないように感じた。原因として、集団の中で、間違いを恐れたり、恥ずかしがったり、自信がなかったりすることがあげられるのではないだろうか。自分の内にある思いを、人の目を気にせず、より楽しく存分に表現できるようにするためには、教師はどのような手立てを講じていく必要があるのか。先行研究から、身体表現を重視した授業、グループ活動で仲間との関わりを重視した授業、導入を工夫して子どもの授業に対する関心・意欲を高めようと試みる授業の実践を知り、これらの教師の手立てが、子どもたちの積極的な表現に繋がるのではないかと考えた。また、安心して心を開くことのできる集団づくりが積極的に表現することを

支えていると考える。これは音楽科のみに関わらず、他教科でも共通して言えることだろう。

#### (2) 研究の方法

先行研究から理論をまとめていき、研究の見通しを立てる。それをもとに仮説を立てながら、実践や授業観察を通して理論を検証していく。

### 2 先行研究の検討

#### (1) 子どもの満足感

真鍋 (1994) は、「音楽の授業においては、表現したいという想いを持たせ、安心して表現できるよう配慮し、表現してよかった満足感を残すことが大切」と述べている。そのために、①子どもの考えや世界を大切にする。②表現が平気になり、表現したいという意欲を持たせるようにする。③表現したいことが、聴き手に伝わる方法を身につけさせる。という3つの事を授業の柱として、「教師に向かって表現できなくても、友人同士になら自己表現できることを大切にしたい」としている。このようなベースのもとで行われる授業は、子どもに安心感と必要感を持たせ、積極的な表現を引き出す。また、「表現」は音楽を経験する領域の一つであり、音楽の授業の核となる活動である。子ども主体の真鍋の提案は、音楽科の基本理念そのものであると考える。

#### (2) 「表現」と「鑑賞」

塩野 (1987) は、「受信側の視点の重要性への認識が、現在の音楽科教育において欠落しているのではないか。『鑑賞』という受信行為なくして『表現』という発信行為は意味を成さない。広義の『鑑賞』という行為を経て、はじめて『表現』という

行為の価値判断が成立する。表現には必ず『鑑賞』という立場が存在するのであり、他者の表現を受容し、感動し、吸収しようとする柔軟な発想と姿勢が育成されていなければ、自己表現の価値を失ってしまう。技術面とともにそれを受容する感動面の体系化にも目を向ける必要がある。」と言っている。表現と鑑賞は常に一体であり、相互理解がベースとなっている。表現者のみでは成り立たないものなのである。(図1) そうすると、いかに表現する側と受け取る側からなるより良い集団づくりが重要なかがわかる。

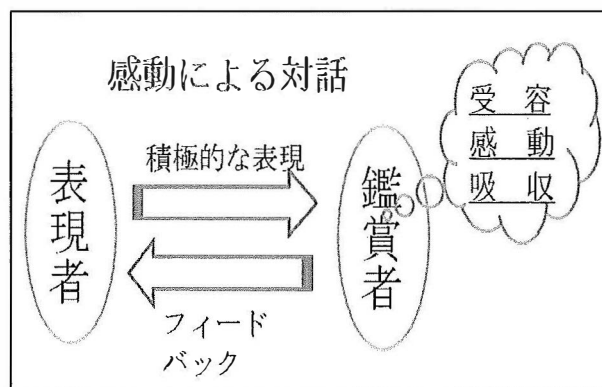


図1. 表現者と鑑賞者の好ましい関係

### (3) かかわり合うことの大切さ

佐藤（1994）は、自らの授業実践を通して、次のことを述べている。「声を出す、口を開けることは自然なことであるが、学年が進むにつれて、勇気が必要になる。自分の想いをそのまま声に出して表現できる喜びと友達と声を合わせる喜びを感じさせたい。」小谷（1994）も、「一人一人の声を認め合うことがなければ、個々の心が開かれた表現とはいえないし、集団に埋もれた心では、生き生きとした表現はできない。子どもたちが一人一人の表現を認め合い、自分の個性をクラスの中で発揮していくことが大切である。」と述べている。

多くの論文で、ペア学習やグループ学習の「表現」と「鑑賞」によるかかわり合いの特性を活かした授業展開を提案していることに気付いた。ミニコンサートの設定やグループ学習を設けて形態を工夫し、子どもが主体的・創造的に活動できるような工夫がポイントとなってくる。

また、小谷は「教師と児童、児童同士の信頼関係は、学習に対する意欲に大きく影響する。教師もワンフレーズを演奏する際には本気で演奏することを心がける。そうして子どもたちも本気で聴

こうとする。そのような積み重ねから、教師と児童、児童同士の信頼関係と心の響き合い・結びつきが生まれる」と述べている。表現者と鑑賞者の中に信頼関係が無ければ、豊かな表現に意欲的に取り組むことは難しいと考える。

### (4) 基礎・基本の必要性

そのような活動をより充実させるために、多くの論文で、基礎・基本を身につけさせることが必要であると述べられている。学習指導要領には教科の目標として『表現及び鑑賞の活動を通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てるとともに、音楽活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う。』という記述がある。解説によると、「音楽活動の基礎的な能力」とは、生涯にわたり児童が楽しく音楽と関わっていくことができるよう、小学校の段階ではぐくんでおきたい表現及び鑑賞の活動に必要な音楽的な基礎的な能力のことを意味している。児童が思いや意図を持って歌ったり演奏したりする能力、感性豊かに鑑賞できる能力のためには、直接的な音楽体験を通して音楽の諸能力を身につけるようにすることが大切であるとされている。また桂（1987）も、「いきなり楽曲の持つ魅力に頼ったような授業は、児童・生徒の照れを誘発するようなものになりかねない。基本的な簡単なものから、心豊かに楽しむところから出発する必要がある。」と言っている。子どもたちが「どのように表現したいか」また「そのためにはどうすればいいのだろうか」と考え、必然的に技能面を身につける必要性が生まれてくるはずである。基礎・基本は短時間で身につくものではない。子どもたちが進んで身につけるような方法で、かつ短時間でも継続していけるような指導の工夫が必要であると考える。

### (5) 「表現」と「表出」

低学年の子どもたちによく見られる、歌うときに自然と飛び跳ねたり手をたたいたり、身体を揺らしたりする楽しそうな姿。表現者と鑑賞者の関係を一体化していると述べた塩野の考えを追究したとき、このような子どもたちの自然な動作の現れは、「積極的に表現している」と言えるのかという疑問が浮かんだ。

そこで、「表現」とは別に「表出」の存在を考えた。広辞苑で「表出」は、「精神活動の動きが外部に表れること。表情・呼吸運動・筋肉運動・腺分泌の変化など。」とされている。楽しい雰囲気

音楽に触れたとき、つい身体を揺らしてみたり、鼻歌を歌ってしまうような姿が「表出」にあたる。一方「表現」とは、「心的状態・過程または性格・志向・意味など総じて精神的・主体的なものを、外面的・感性的に形象として表すこと。」とされている。このことから、「表現」は、表現者自身が、思いや意図を持って自らの意思で内面を表すものであると考える。つまりその目的の先には相手（鑑賞者）が存在しており、相手へ伝える意思を持った上で行われるものであると言えるのではないだろうか。本研究では、特に「表現」について着目していく。

表現と表出を区別して考えたとき、では表出は重要ではないのかという疑問が浮かんでくる。しかし、私の目指す音楽の授業では、やはり「楽しい」ことを前提としたい。楽しさがなければ、豊かな表現にもつながりにくいのではないだろうか。

主に低学年の教科書を分析してみると、「かたつむり」や「アイアイ」、「どんぐりさんの おうち」のように、擬人化された動物や植物になりきりながら身体を動かして活動できる教材が多く含まれている。これは、低学年のうちに想像力を豊かにさせ、かつ身体全体を使った表出活動を多く取り入れることで、表現活動の土台ともなる「心を解放すること」や「表現したことへの満足感」を感じる経験を重ねることになるのではないだろうか。そうして高学年の自分自身の思いや意図を相手へ伝えていくという意味をもった表現へとつなげていくねらいがあるものと思われる。

### 3 実践と結果（明らかになったこと）

#### (1) 「表現」と「鑑賞」

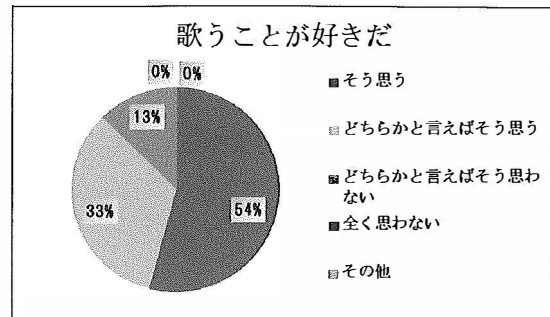
##### ① 「表現」に対する子どもたちの意識

では実際に、子どもたちは「表現」に対して、どのような意識を持っているのだろうか。先行研究で明らかとなった「表現者」に対する「聴き手」の存在は、どの程度、表現者の意識に影響を与えるのかを調査した。県内A小学校の6年生児童24名を対象に、表現と鑑賞に関わるアンケートを行った。

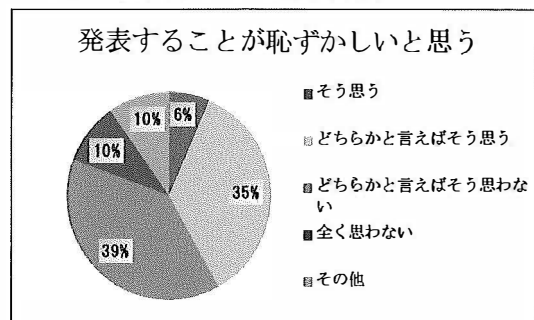
この結果から（グラフ1、2、3）、歌うことが好きな児童の割合が多い半面、思いや意図を持った、発表・伝えることとなると、約半数の児童が否定的な回答をしていることが分かる。このことから、心と身体を開放させたいという気持ちは

あるものの、鑑賞者の存在があると、なかなかそれを外に出せないという子どもたちの気持ちが伺える。

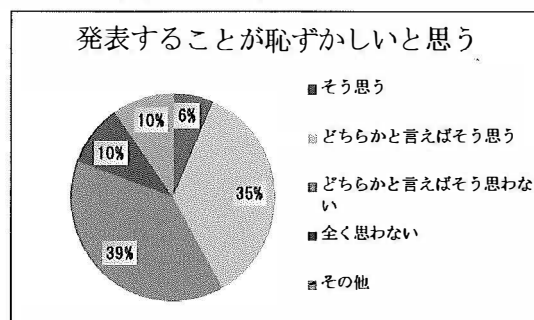
グラフ1. 歌うことについての集計結果



グラフ2. 発表についての集計結果



グラフ3. 発表への恥ずかしさについて



また、「あなたが発表してよかったと思うときはどんなときですか」という自由記述の質問に関して、大きく2種類の回答があった。一つは「正解したとき」「上手くいったとき」というように、自分の考えや想いに同意を得られたとき、という回答である。もう一つは「みんながしっかり聴いてくれたとき」「みんなが拍手をしてくれたとき」のように、表現したことを素直に周りが受け入れてくれたとき、という回答である。このことから、表現するに当たって、子どもたちは聴き手の存在を強く意識しており、いかに「聴き手」つまり、

表現を受け取る「受信者」の存在が重要であるのかが裏付けられた。

## ②山形県内A小学校での実践

歌唱『夕やけこやけ』を教材とし、グループ活動を通して、「聴く人が様子を思いうかべることができるように工夫して歌おう」という題材で授業実践した。聴いている相手に伝えられるように、積極的に意見交換を行いながら、歌詞のみが書かれてあるプリントに、言葉や記号、絵などを使って自由に書き込んでいく。グループでの活動により、互いの想いを認め合い尊重し合いながら、音楽という形にしていこうと一生懸命に考える姿が見られた。(写真1)



写真1. グループ活動の様子

さらに、話し合いの後、グループ活動の成果を全体に発表し、聴き合うことで、表現の仕方や考え方は多様であることを知り、自分た

ちも発表したいと挙手する子どもが多かった。「僕たちは優しく歌うように工夫してみました」と堂々と説明した後に、身体を揺らしたり、表情豊かにのびのびと発表する子どもたちの姿が見られた。「私たちも発表したい」と多くの子どもが挙手をし、積極的に自分たちの思いを伝えようとしていた。発表した後の子どもたちは、1曲に自分たちの思いを乗せて表現できた満足感に満ちていたようだった。また、子どもの中には「楽しかった」という感想を書いてくれた子どもが多くいた。この感想からも、聴き手を意識した表現活動、聴き合う活動は、子どもの表現に対する意欲を引き出すと考える。

こうした活動を通して、子どもたちの歌う姿勢や態度、歌声に明らかな変化があった。授業前半に歌ったときは、メロディー重視で元気で明るい歌声が響いた。一方、活動後に歌ったときは、自然に体を揺らしたり、表情も大変豊かで、強弱に気をつけた美しい頭声発声が教室に響いた。この時指導者は、頭声発声を指導したわけでもなく、表情や身振りについても指導は行わなかった。子どもたち自身の思いや意図が音楽という表現手段

を介して現れたのだろう。それほどに思いを持って自らの意思で積極的に表現活動をするのできたのではないかと考える。

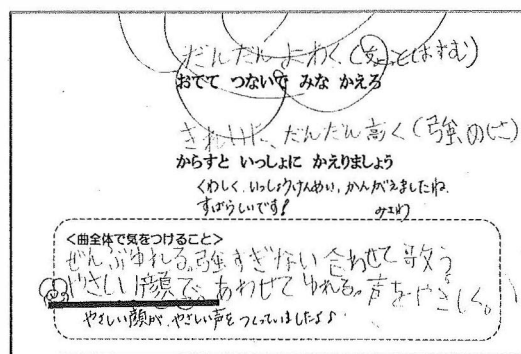


図2. 授業後のワークシートより①

さらにグループ活動の際には、歌詞に工夫点を自由に書き込ませた。そこには、歌い方だけではなく、「身体を揺らして」「優しい顔で」「心をつなぐ」といった書き込みもなされていた。聴き手・見せる相手、つまり鑑賞者を意識した記述、また、びっしりと書かれた工夫点など、“自分たちの思いを伝えたい”という気持ちが、このワークシートからも良く見てとれる。(図2、3)

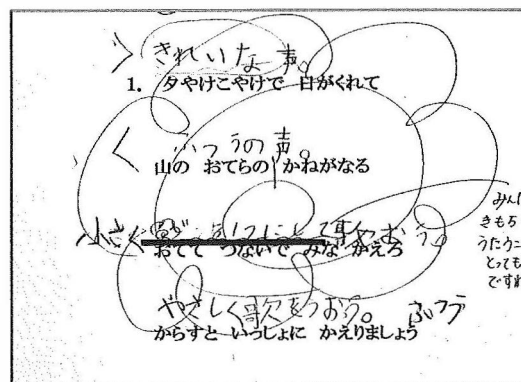


図3. 授業後のワークシートより②

しかし、発表と鑑賞の関係からなる聴き合う活動について、配慮が必要であるとも感じた。それは、全員が同じ活動、同じように発表できる活動時間を保証することである。聴き手を意識させた活動であるならば、全員が発表を通して達成感・成就感を味わうことができるようにしたい。全員が同じ活動を行うということは、児童の表現に対する恥ずかしさやためらいも和らげると考える。また、仲間の様々な表現を鑑賞して自分の表現へと繋げていくことができる大切な機会であると考



える。

### ③山形県内B小学校での参観から

表現者と鑑賞者との関係のサイクルを成り立たせるためには、鑑賞者が表現者の表現を受け入れようとする姿勢を持つことが必要である。それは音楽の授業だけではなく、他教科の授業でも同じことが言える。実習校で配属された学級では、日頃から、発表を聴く側の子どもたちへの配慮を行っていた。それは授業者の聴き手に対する言葉がけに多く見られた。聴き手がしっかりと耳を傾ける姿勢を整えている状態を保っていた。

ある日、騒がしい中で発表しようとしたX児は、とても不安そうな表情をしていた。その後、授業者の「一生懸命発表しようとしている人がいるのです」という全体に対しての言葉がけにより、全体が落ち着きしっかりとX児の話に耳を傾ける姿勢に変わった。そんな雰囲気の中でX児は落ち着いて自分の意見を述べることができ、さらにそれを聴いていた子どもたちからも「なるほど」「違うんじゃないかな？」というフィードバックに繋がっており、結果として学級全体の学びが深まる様子が見られた。

特に高学年になると、発表に対して、恥ずかしさや失敗を恐れる気持ちが大きくなりがちで、発表することに勇気が必要である。勇気を出して一声出そうとしている子どもたちの気持ちを支えることは、発表する子どもたちの、表現に対する意欲に大きく影響すると考える。

#### (2)他者とかかわる力

##### ①山形県内A小学校での実践

積極的に表現できるようにするためには、他者に心を開き、仲間としてのつながりを高めることが必要である。そこで導入時に、他者とかかわる力をつけるために『手拍子まわし』を行った。全員で一つの輪になり、ひとり一発ずつ、順に手を打ってリレーしていくものである。気持ちよく授業に参加できるようにするためには、導入部分で工夫ができるのではないかと考えたからである。

子どもたちは笑顔いっぱい、手拍子まわしが成功すると飛び跳ねて全員で喜び、仲間との一体感を感じながら、かかわり合いを楽しんでいた。仲間と一つのことを成し遂げた一体感を感じ、仲間とかかわることの喜びを心から感じた姿だろう。その後の授業においても、継続して元気に歌う姿が見られた。このようなかかわり合いの積み重ね

が、認め合うことのできる、また安心して心を開くことのできる集団づくりへとつながり、結果としてそれは、積極的な表現へとつながると考える。

また、授業の導入に全員で歌う際に、みんなで手をつないで歌った。最初は2～3人の小さな輪。曲の区切りごとに人数を増やしてその輪を大きくしていく。最後には全員で一つの大きな輪をつくる。一つの輪ができた頃には、全員が笑顔で自然と一体感を持って繋いだ手を振りながら歌っていた。(写真2)

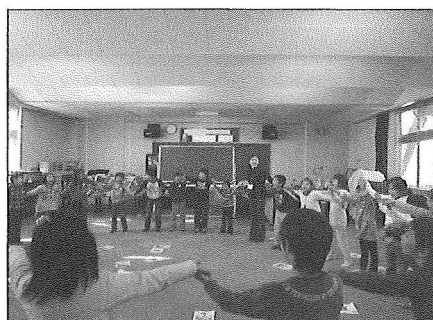


写真2. 導入時のかかわり合いの活動

子どもたちは曲調に合わせて、友達とのかかわりを楽しんでいるようだった。しっとりとした綺麗な曲では、ゆったりと身体を揺らしながら。テンポの良い元気な曲では、手をつないだ友達と飛び跳ねながら、音楽を楽しんでいた。このような、手をつないだり相手の身体に触れたりしながら、身体全体で友達とかかわり合う活動は、音楽を通してだからこそできるということもあると考える。

#### (3)基礎・基本の必要性

##### ①山形県内C小学校での実践 - 教材名:「エーデルワイス」(器楽) -

全員の前に立ち、リコーダーの指遣いを実際にやって見せながら「歌詞で歌う→階名唱で歌う→階名唱をしながら指遣いの練習→実際にゆっくりリズムをつけずに吹いてみる→ゆっくりとリズムをつけて吹く→曲に合った速さで吹く」といったプロセスを、曲を短く区切りながら行った。粘り強く活動についてきた子どもたちは、スムーズに楽曲全体を吹くことができるようになった。階名や指遣い、リズム等の基礎・基本をしっかりと身につけさせることが、表現することを楽しむためには必要であることが分かった。しかし一方で、練習の途中の段階で飽きてしまう子どもも少なかった。Y児は普段から好ましくない行動を起

こしがちな児童であったが、リコーダーで新しく習う『エーデルワイス』の指遣いの練習では、取り組む前から「できない」と言って練習をしぶる様子が見られた。音楽に対する苦手意識や練習の煩雑なイメージの改善には課題が残った。

#### ②山形市内A小学校での実践 -6学年『星の世界』(歌唱) -

3時間を通して3部合唱を扱った際、パートごとの練習が不足したまま合唱をすると、子どもたちはどこか自信がなさそうに不安げな表情を浮かべながら歌っていた。そこで、次時にパート練習の時間を多く取り、各自が自信を持って歌えるようにしてから合唱へ取り組むようにした。まだお互いの歌声を聴き合うことは難しかったものの、全体を聴いてみると、確かに3部のハーモニーは美しく重なっていたし、子どもたちも楽しげな表情で、中には感情を込めたような表情をしながら、身体をゆらしながら歌う子どもの姿が見られた。

このとき、自分の担当するパートの旋律を楽曲の基本と考える。そうすると、自分のパートをしっかり歌えることで、3声が重なった時に、より全体での表現を楽しんだり、自分の歌声にフィードバックして、よりよい表現を目指す意欲を持つことになるのではないだろうか。基礎・基本を固めることは、表現する子どもたちの自信と意欲へ繋がり、それが積極的な表現へ結びつくと考える。

#### (4)心と身体を開放させる活動

#### ①山形県内C小学校での実践 -教材名:『バードウォッチング』 -

『バードウォッチング』は、歌唱に身体表現を加えた活動として教科書に採用されている。この活動をした第3学年の児童らは、うまく歌えない・踊れないながらも、笑顔で友達と笑いあいながら、どの子どもたちの表情も生き生きとしていた。音楽活動を存分に楽しんでいる様子が伺えた。友達とみんなで同じ動きをしながらの活動では、どの子も恥ずかしがらずに、上手・下手にこだわらずに楽しんで活動できている様子だった。このような活動は、「楽しむ」というスタンスのもとで、心と身体を開放させながら、「表現」の楽しさを経験させていると考える。「積極的に表現」することの土台ともなる心と身体を解放させる経験を積むことで、そこに技術が加わったとき、心から音楽の楽しさを感じることが出来るようになる。

#### ②山形県内B小学校での参観から

月の歌として取り扱われていたのは、以前 NHK の「みんなのうた」で放送されていた『赤鬼と青鬼のタンゴ』であった。1年生の子どもたちが歌うときは、教師も児童も一緒になって、身体を思いつき動かしながら笑顔で元気に歌っていた。5年生でも男子を中心に楽しげに身体の動きを取り入れながら歌う様子が見られた。積極的な「表現」と言うよりは、「表出」活動に近いと考えるが、高学年になっても素直に心と身体を開放できる気持ちの柔軟性を持ち続けていられることが素晴らしいと感じたし、このような活動を継続しているからこそ、その柔軟性を保っていくことができるのだらうと考える。

また5学年では、マンボやボディパーカッションに創作ダンスを加えながら表現活動を行っていた。ここでは「自分の殻を破る」ことが大きなテーマとなっていた。練習当初は、恥ずかしさや照れを感じさせる動きをしていたものの、最後の発表では、一人一人が大きな声を出しながら、動きもダイナミックで、さらにマンボを3回も笑顔いっぱい踊り続け、「もう一回!」という声まで聞こえてきた。これこそ、心と身体を解放させている姿だと感じた。「楽しかった!」「やってよかった!」という児童の言葉が、積極的に表現活動を行ったことにより表現の楽しさを心と身体全体で感じた、何よりの証拠であるのではないだろうか。

## 4 考察

### (1)聴き合い・表現し合う

表現は“自己表現”であるが、それは聴き手がいてこそ、そこに価値が生まれ成り立つものであるということが、先行研究から明らかとなった。

「聴き手」を意識した活動では、「聴かせたい」「想いを伝えたい」という気持ちで、子ども自身が必要感を持って取り組むことができると考える。

そのために、指導者は発表者つまり「表現者」のみに注目するのではなく、「鑑賞者」である周りの子どもたちに対しても、「聴く」ことを意識させることが必要である。発表をしぶる子どもや、発表しようとして黙ってしまう子どもも時折見受けられる。この時、「恥ずかしがり屋」とか「発表が苦手な子ども」のように、発表をしぶる子ども自身に原因があると考えがちになってしまう。しかし、その子どもなりに内には必ず自分の考えや想いを持っている。それを引き出せる環境を整える

こと、つまり「聴き手」である周りの子どもたちの意識付けや、「表現者」を思いやり、受容しようとする態度を育てることが、指導者の役割としてあるのではないだろうか。皆の前で発表したり表現することは、大変勇気のいることである。一人の表現を全体の学びへとつなげていくこと、決して無駄にしないようにする集団としての意識が、一人一人の表現しようとする意欲へとつながるのだと考える。

#### (2) 他者とかかわりを大切に

表現するにあたって聴き手の存在が重要になるのであれば、表現者と聴き手の人間関係が大きく影響するはずである。

『手拍子まわし』の活動では、全員で成し遂げた達成感や、友達と顔を見合ってタイミングを計ったりしながら、活動を楽しむ姿が多く見られた。仲間とかかわり合うことが楽しい、一緒に何かをやってみたい、ここでなら安心できると思えるような集団では、自分から表現しようとする意欲や仲間と認め合おうとする意識、一緒に協力しようという気持ちが高まり、より積極的な表現に繋がるのではないだろうか。

また、これまでを振り返ると、導入で既習曲を歌う際に身体表現を加えたり、ペアやグループでの表情の確認や、心を合わせて歌えるように仲間を意識させる配置や指導者の言葉がけなど、一般的なウォーミングアップの活動を工夫することで、他者とかかわる力をつけることに繋がるのではないかと感じている。導入部分の工夫による効果の可能性を感じた。

県内B小学校では、当番の子どもたちが前へ出てきて「はじめましょう」と歌った後に、全員が復唱することで、始業のあいさつとしていた。そうすることで、個人の表現技術を高めるとともに、仲間を受け入れる・受け入れられるという経験を重ねていることとなっているのではないかと考える。全員の前へ出てきて歌うことはとても勇気のいることである。しかし、そうした一つ一つの小さな積み重ねが、認め合える・心を開ける集団を育てていくのではないだろうか。

#### (3) 基礎・基本の定着のために

リコーダーの指導で、スモールステップで、階名唱、指遣いなど一つ一つを丁寧に習得しながら、基礎からしっかりと練習に取りくんだ子どもたちは、曲が完成に近づいてくると、演奏を楽しみな

がら、より表現を深めるためにタンギング等の技能習得に積極的に取り組んでいた。基礎・基本が身につけていると、表現の楽しさをより感じるることができることがわかる。

リコーダーは自分の吹く息が音となって音楽をつくりあげる、本来楽しいものである。しかし、子どもによっては、指遣いが難しかったり、音符と指遣いが結びつかない、上手く穴をふさぐことができずに綺麗な音が出ない、というように難しさもある。音楽専門の知識や技術が必要である。しかしそれは、リコーダーを演奏するにあたっての基礎・基本となる部分である。このような難しい面もある基礎・基本の定着を図るためには、子どもたちの意欲を保たせながらも、無理なく続けられるような指導の工夫が必要である。

例えば、リコーダーの穴を小さくするために、水道用の水漏れテープを利用した事例がある。テープに穴開けパンチで穴を開け、リコーダーにはりつける。指の細い子どもも無理なく穴をふさぐことができ、綺麗な音を出すことができる。また、指遣いと楽譜を結び付けるように、五線譜の音譜の下に指遣いを示した図を一緒に示しておく事例がある。そうすることによって、運指表と五線譜を見比べる同時処理をより容易にできるようになる。このような少しの工夫で、子どもの意欲を継続させることに繋げることができる。指導者の少しの工夫とアイディアで、技能の難しさを克服し、子どもの意欲を保ちながら、基礎・基本の定着を図ることができる。

#### (4) 心と身体を開放させる活動

積極的な表現のベースとなるものとして、「表出」、つまり心と身体を開放させる活動があげられると考える。表出活動を通して、表現の「楽しさ」を知ることは、「積極的な表現」以前に、大変重要なことである。幼児や低学年の児童にとっては、表出活動の方が多くなることが予想される。積極的な表現は、幼児や低学年での音楽教育でどのように考えられるかが問題となってくるが、この発達段階の音楽教育では、後の積極的な表現に向けたベースづくりの時期であると考えてよいのではないだろうか。そうして学習段階を見ながら、徐々に、「夕やけこやけ」の実践例のような聴き手を意識させた活動を織り交ぜていくことができると考える。

## 5 到達点と課題

これまでの研究及び実践の結果から、音楽科の授業において積極的に表現するために必要な要素が明らかとなった。①アンケート調査から、表現するにあたって、聴き手の存在が大きく影響していることがわかった。さらに『夕やけこやけ』の実践では、聴き手を意識することで、より豊かで積極的な表現力が引き出された。これらの結果から、「表現」と「鑑賞」が常に一体化していることが大切であると言える。②表現者と鑑賞者の間で行われるフィードバックなどのサイクルが円滑に行われるための基礎となる、他者とのかかわり合いを通した人間関係づくりが必要である。③リコーダーや合唱の実践から、より豊かな表現のためには基礎・基本の定着が必要であることが明らかになった。④「表現」のベースとなる「表現」そのものを楽しめると思うことができる気持ちを育てるために、心と身体を開放させる活動を取り入れること。以上の4点が、積極的な表現のために必要であると考えられる。しかし、今後の実践にあたって以下の課題が残った。

### (1) 教材研究(基礎・基本の定着と個人差への対応)

特に技能が必要となる活動においては、練習の継続や気持ちの面での粘り強さも要求され、技能面での個人差は顕著に表れる。さらに、歌唱表現においても、より豊かな表現のために技能や知識が必要となってくる。そのような背景から、音楽に対して苦手意識を持ってしまう子どもも少なくない。一方、個人的に音楽を習っている子どもにとっては、個人差のある集団が対象である学校の音楽の授業は、物足りなく感じてしまうかもしれない。音楽科特有の技能習得に伴う意識も、表現への消極的な姿勢の原因となっているのではないだろうか。

これらを打開するために、またより豊かな表現活動を積極的に行うためには、基礎・基本を身につけることが必要となる。毎時間少しずつでも継続できるような、楽しく無理のない教材を研究・開発していく。また、リコーダーなどの器楽演奏における技能の定着については、色つきシールの利用や記譜の工夫など、どの子どもも無理なく学習できるような工夫ができるよう、事例研究や教材研究を進め、実践で生かせるようにする。

### (2) 指導者のはたらきかけ

子どものつぶやきや気づきは、集団全体で学び

を深めるチャンスである。このつぶやきや気づきを、教師がどう捉え、全体にフィードバックしていくかで、子どもの成長が大きく違ってくる。また、それは互いの考えや意見について集団全体で考えていく時間にもなり、互いを認め合ったり助け合いながら、人間関係の構築に大きく関わると考える。指導者が子どもの思考や思いを大切に、それを全体に広げることのできる技術を持っている。さらに、子どもの豊かな表現を引き出す発問についても研究を進めていきたい。「どうですか」という発問よりも「どんな気持ちになりましたか」のような、子どもの思いに素直に寄り添えるような発問やボキャブラリーを蓄えておきたい。

## 引用・参考文献

- 阿部俊彦：『サッとツール&ふわっとサポート 333』、ほんの森出版、2009
- 秋田喜代美 編集：『教師の言葉とコミュニケーション』、教育開発研究所、2010
- 加藤辰雄：『誰でも成功する発問のしかた』、学陽書房、2010
- 桂博章：「イメージ形成と自己表現力」、『季刊音楽教育研究』、第30巻、第1号、音楽之友社、pp.7-14、1987
- 小谷由美：「心を開く表現から感動の共有へ - 子どもたちが進んで学ぶ基礎・基本」、『教育音楽7』、音楽之友社、pp.40-43、1994
- 熊木真見子：『子どものコミュニケーション力を高める！音楽遊び ベスト40』、明治図書、2007
- 真鍋なな子：「心を満たして音楽的に表現できる子を育てる - ペア学習の効用」、『教育音楽7』、音楽之友社、pp.43-45、1994
- MEC Digital、<http://www.mec.gov.py/cmsmec/> アクセス 2010年12月7日
- 文部科学省：『小学校学習指導要領解説 音楽編』、教育芸術社、2008
- Paraguay Sistemas Educativos Nacionales、<http://www.oei.es/quipu/paraguay/index.htm> 1 アクセス 2010年12月10日
- 新村出 編：『広辞苑 第四版』、岩波書店、1991
- 塩野勇記：「創造性の受容と享受の原理」、第30巻、第1号、音楽之友社、pp.2-6、1987
- 竹下英二：『優しさと思いやりの育つ 音楽科グループ学習』、明治図書、1992